



How well does well work in conversation? : a unified approach

著者	山内 信幸
雑誌名	同志社大学英語英文学研究
号	56
ページ	282-302
発行年	1992-03
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001707

How Well Does *Well* Work in Conversation?

—A Unified Approach—*

山内信幸

I

英文法の伝統的な品詞分類の枠組みにおいて、副詞と同様に、比較的研究の進んでいない文法範疇として、「間投詞 (interjection)」と呼ばれるものが挙げられる。例えば、“Ah,” “Oh,” “Uh-huh”などは、通常、何らかの音韻的特徴を備えていて、統語的な関係を維持しえない単なる感情の発露を表す言葉にすぎず、しかも、それ自体、何の命題の内容ももちえないために、言語体系の中では、周辺的な位置におかざるをえず、それ故に、音韻論・統語論・意味論の各分野では、十分な研究対象とはなりえないという認識が支配的であった。しかしながら、例えば、

(1) *Well!* I'd never have believed it!

(2) Do you remember John Smith?—*Well*, he's become a teacher.

などのような例文は、当然のことながら、先行する文脈を踏まえて発話されたものであるため、従来に見られるような、狹義の “a natural ejaculation expressive of some feeling or emotion, used or viewed as a Part of Speech” (*O. E. D.*) という定義だけでは十全な説明を与えることはできない。そのために、先行文脈との関連の中で、発話を相互に結びつけたり、談話における一つの境界を示す「間投詞」としての別の機能が、ここ十数年来、言語学者、とりわけ、談話分析に関心を持つ研究者の注目を集めつつある。

本稿では、最近の談話分析の知見によって、その特徴が明らかにされつつある *well* に関して、その分布状況を中心に、語や文を越えたより大きな単位としての談話というレベルにおいて、その機能的特徴及び語用論的制約などを探り、より統合された枠組みの中での分析を提案する。

II

本節では、*well* という語そのものが抱えている、あるいは、それに纏わる様々な問題点を概観してみることにしよう。

まず第一に、*well* に対する用語上の混乱や不統一が挙げられる。*well* は、その品詞上の機能から、形容詞、副詞¹そして間投詞となりうる同音異義語であるが、例えば、前出の(1)、(2)の例において、(1)の場合は、感嘆符が付いていることなどからも、伝統的には間投詞と見ることができるが、(2)の場合は、副詞か感嘆詞かの認定が難しい。そのため、様々な学者によって、様々な用語が提案されてきた。例えば、“hesitator,”² “utterance-initiator,”³ “initiator,”⁴ “connective”⁵ などの用語は、それぞれ、*well* の有する機能の一側面しか表しておらず、また、“particle”⁶ ではあまりに中立すぎると言えよう。そのため、本稿では、文法を越えたレベルで様々な機能を有するものとして、Schiffrin (1987) の “discourse marker”⁷ という用語を採用することにする。

次に、上述のこととも若干関連していることであるが、*well* の意味・機能が複雑かつ多岐にわたるため、辞書においても満足のいく説明を与えられていないということが指摘できよう。例えば、英米の代表的な辞書にあたってみると、

- (3) 1—used to express satisfaction with what has been said or done
 2a—used to express assent or resignation
 2b—used to express surprise and expostulation and often reduplicated
 3—used to indicate resumption of a thread of discourse or to

introduce a remark (*Webster's Third New International Dictionary*)

- (4) Employed without construction to introduce a remark or statement, sometimes implying that the speaker or writer accepts a situation, etc, already expressed or indicated, or desires to qualify this in some way, but frequently used merely as a preliminary or resumptive word (*O. E. D.*)

という定義が与えられているが、どちらかと言えば、前者は well の意味に依拠したものであり、後者は well の機能に依拠したものであるため、well の全容を捉えているとは言い難い。これも、well を単一の側面からは捉えきれないことを示す例と言えよう。

第三の問題点としては、well を発掘する資料面での制限が考えられる。通常の会話では、ほぼ150語毎に現れるとされる⁸ well の第一次資料として、従来の研究では、専ら、書き言葉に依存していたために、録音テープをそのまま振りおこすことによって明らかにされる談話分析⁹ すなわち、様々な意味の差異を伝えるかぶせ音素的な側面の分析¹⁰ がやや立ち遅れてしまっているという感が否めない。

さらに、well の扱いが困難であることを示す証左として、外国語に翻訳した際の適訳の選定の難しさを挙げることができよう。¹¹ 例えば、小西 (1989) では、well に対応する訳語として、次のようなものが列挙されている。

- (5) 「まあ、[あらっ、おや(まあ)、あらあら]」
 「ええまあ、[さあ(それは)、ええ(ですけれど)]」
 「さあ(それは)、[ええではまあ、うーんさてそれは]」
 「ええっと、[うーんとね、さて]」
 「それで、[それはそれとして、さてそれで]」
 「まあともかく、[ではまあ、ああやれやれ]」
 「それで、[だから、さあ]」
 「まあ(言ってみれば)、[まあ(そうですね)、うーんまあ]」¹²

この日本語の訳語の一覧表からも明らかなように、*well* のもつ微妙なニュアンスの差異を表すための苦心の跡が窺われるが、文脈に応じた適語訳の選定となると事態はより一層困難なものになるであろう。

以上のように、*well* のもつ種々の内的あるいは外的要因によって、その意味・機能の記述に関しては、かなり洗練された分析が必要であることは明白である。

III

本節では、*well* の諸相として、生起位置によるその統語的特徴と種々のタイプの文との共起関係によるその意味論的特徴を調べ、さらに、機能的特徴や語用論的制限などについて考察してみる。

まず、生起位置に関しては、文末を除く様々な位置に分布するが、用例¹³の数から言えば、文頭が圧倒的に多い。¹⁴ また、文中においては、下の例が示すように、構成素の連鎖の中の様々な位置に生起する。

<文頭>

(6) *Well!* I never expected to see you here.

(7) *Well*, did you ever! Mary's finally marrying Dave after all!

<文中>

(8) John kicked ... *well* ... the bucket. (literal meaning)

(9) Samson would refuse to sing ... *well* ... any popular songs.

(10) In that house ... *well* ... there used to live a mad scientist.¹⁵

(11) When I thought about it at all I thought, *well*, maybe if I can't get pregnant by Brooks I can by someone else.

(12) And he looked—*well*, goofy.

(13) He's just the—*well*, he is the representative for the firm.

<文末>

(14) *Janet might wait for me for ten minutes, *well*.

なお、文末には生起しないという事実は、後述するように、*well* が一般的な導入的機能及び談話における中断や話題の転換などの機能をもつため、文末の位置には生じにくいという観点から説明できよう。

次に、種々のタイプの文との共起制限を調べてみよう。

<平叙文と>

(15) *Well*, we went out on these trips and caught lobsters off the edge of the Continental shelf.

(16) *Well*, it shouldn't be too exciting, but it will be fascinating.

<疑問文と>¹⁶

(17) *Well*, did Harry capture the aarvark?

(18) *Well*, why isn't the garbage out?

<命令文と>¹⁷

(19) *Well*, spill it, man.

(20) *Well*, get the hell out of my way then.

<感嘆文と>

(21) *Well*, of all the goddamned nonsense!

(22) *Well!* said Mrs. McGillicuddy. *Well!* Words failed her.

以上の例からも明らかなように、種々のタイプの文との共起関係に関して

は、何の制限もなく、平叙文、疑問文、命令文、感嘆文のいずれの場合においても、*well* は生起する。これは、*well* 自体が何の命題的内容ももっていないことを示しているに他ならない。

今まで、文文法の範囲内での *well* の統語的及び意味論的特徴を概観してきたが、これだけでは不十分なのは明らかであり、*well* の機能的特徴や語用論的制限などについては、より大きな談話というレベルでの考察が必要となってくる。

前節で見たように、*Webster* 及び *O.E.D.* の定義では、前者は *well* の意味面に、後者は *well* の機能面に焦点が当てられているが、本来は、これらは、相補的なもので、より統合された記述・説明がなされるのが望ましい。さらに、談話のレベルにおいて、話し手と聞き手によるコミュニケーションという枠組みの中で、*well* を考察する必要がある。

先行研究の知見として、*well* には2つの機能があることが指摘されている。¹⁸ 一つは、発話の冒頭で、一般的な導入を図り、先行発話との分離と新しい一区切りの談話の始まりを示す“frame”と呼ばれる機能であり、もう一つは、先行発話との応答において、その発話内容を補強したり、修正したりしながら、先行発話への指示的な働きをする“qualifier”と呼ばれる機能である。これは、例えば、質問との関連性は一応保ちながらも、間接的な答えに付けられたり、不躰さや失礼さを拭うために、聞き手の発言が相手の体面を損なう恐れのある場合などの丁寧表現として用いられたり、あるいは、「苛立ち・不快・ためらい」などの様々な感情的色彩などを表したりする。

それでは、“frame”と“qualifier”の具体例を簡単に見てみることにしよう。Carlson (1984) は、“frame”の機能を、(1) 切り出し (opening), (2) 移行 (transitional), (3) 締めくくり (closing) に分けて、詳述している。¹⁹

<切り出し>

(23) The sound of the motor died away. When it was quite gone, Patton said, “*Well*, I guess we better go back to the office and do

some telephoning.”

- ㉔ “Suppose you just tell me the story of your life.” “*Well* . . .” she said with a nervous laugh, “I am thirty-six years old. I was an only child.”

以下の例では、㉓は本題に入るため (preparatory move)、㉔は話題をわき道に移すため (topic shift)、㉕は話題を元に戻すため (turn taking) に、それぞれ、*well* が用いられている。

〈移行〉

- ㉓ “You Water Gage?” “This is Mister Gage speaking.” “*Well*, Mister Gage, I understand you’re in the market for some jewellery.” (preparatory move)

- ㉔ “Can you remember any other little things about Mr. Hosmer Angel?” “*Well*, and what happened when Mr. Windibank, your step-father, returned to France?” (topic shift)

- ㉕ “The bridge gave me a sovereign, and I mean to wear it on my watch chain in memory of the occasion.” “This is a very unexpected turn of affairs,” said I. “And what then?” “*Well*, I found my plans very seriously menaced.” (turn taking)

〈締めくくり〉

- ㉓ “*Well*, I guess there’s nothing in all this to help me. But you can see why I had to talk to you. I guess I can give you the money now.”

- ㉔ “It’s too bad about my diary,” she said, “*Well*, thank you very much and I hope I haven’t wasted your time.” “*Well*, I hope you’ll find it, I’m sure,” said the other woman obligingly.

また、Carlson (1984) は、“qualifier” の機能として、応答の組み合わせ

との関連で、(1)質問一答え型と(2)その他の型(a. 応答 (replies), b. 議論 (arguments), c. 訂正 (corrections), d. コメント (comments), e. 感嘆 (exclamations), f. 話題の示唆 (topic suggestions)) に分類している。²⁰ここでは、幾つかの例を記すにとどめよう。

〈質問一答え型〉

- ⑩ “So that you think we’ve got to accept what he says?” “*Well,*” said Huish, “Sir Reginald seems to have accepted it, and I don’t suppose there’s anything would get past him.”
- ⑪ “What does this Flack look like?” “*Well,*” she said, “he’s a little squatly number, with a bit of moustache. A sort of chunky type. Thickset like, only not tall.”

〈その他の型〉

- ⑫ “That girl’s mental,” said Frances. “Sometimes I really think she is!” “*Well,* I know she is.” (replies)
- ⑬ “You know, do you not, that we have made every effort to locate her?” “*Well,* I’m telling you that we have.” (arguments)
- ⑭ “Funny, isn’t it?” The voice was very, very cold now. “*Well,* not really.” I agreed and drank the rest of my drink. (corrections)
- ⑮ “How about something to eat? Want to have a little bite?” Rob shook his head. “*Well,* I reckon you’re tired.” (comments)
- ⑯ “If you want to pick lead out of your belly, get in my way.” “*Well, well,*” I said, “a tough guy.” (exclamations)
- ⑰ “Now think what would happen if you were stabbing down with a thing like that?” “*Well,* what would happen?” (topic suggestions)

Carlson (1984) の分析は、*well* の機能に関する従来の二分法に基づき、

それぞれに関して緻密な観察を行っている点は、十分評価できるものである。特に、“qualifier”としての機能の分析に関しては、対話の種類を質問—答え型とその他の型というようにできる限り簡潔に整理した上で、wellの示す様々な意味あいを伝えようとしている点は特筆するに値するものと言えよう。ただ、あまり網羅的であろうとするために、wellをより統一した形で捉えようとする視点が欠けているのは残念なことである。²¹

次節では、談話を支える上での幾つかの重要な要件である「会話の原則」との関連から、wellの機能を再検討し、何らかの統合された一般化が可能かどうかを検討してみることにする。

IV

会話が成立するためには、Grice (1975) のいう「会話の原則」²²が働いていると考えられるが、wellの生起の場合にも、当然、この原理の適用を受けていると考えられる。本節では、wellに働く幾つかの語用論的制約を検討してみることにしよう。

まず、Lakoff (1973) が挙げている応答における well (本稿では“qualifier”)の生起に関して、生起しえない場合を規定するという消極的な一般化と「会話の原則」の中の、とりわけ、「関連性」との関連を検討してみよう。

Lakoff (1973) によれば、(1) 直接の答えが与えられている場合、(2) 求められている情報を与えるという意味で、質問への答えをなしていない場合には、wellが先行するような答えを発することはできないとして、²³次の例の例を与えている。

例 What time is it?

- Well, I just told Bill that it was noon.
- Well, the sun just came up.
- *Well, three o'clock.

- *Well, don't worry, 'Star Trek' won't be on for 45 minutes.
- *Well, none of your business.
- *Well, it's three o'clock, so you can't eat dinner yet.

それぞれの応答において、(1)と(2)の条件が適用されて、3番目から6番目の応答が非文となる。一方、「会話の原則」に違反していると思われる1番目と2番目の応答に関しては、「insufficiency」²⁴という概念を用いて、その容認可能性を説明しようとしている。しかしながら、Lakoff (1973) 自身も特殊な場合なら容認可能であると認め、また、Hines (1977) なども指摘しているように、²⁵ 例えば、「4時の時報を聞いたばかりの時に相手がまた時間を尋ねたりするのは、先ほどの時報が間違っていたり、時計が狂っている」というような場合なら、次のような応答も十分成立可能である。

(9) What time is it?

—Well, four o'clock.

つまり、Lakoff (1973) の提案した“insufficiency”という概念はあまりに狭すぎ、²⁶ また、「会話の原則」を考慮に入れていない概念であるため、説明に破綻をきたしたと言えよう。

(9)及び(9)の例は、どちらも、「会話の原則」を踏まえ、しかも、少なくとも、話し手の方では推論によって求める情報が引き出せるという点で、間接的ではあるが、一定の関連性を保っているのは明かである。そこで、先行文脈との一定の関連性が維持され、かつ、間接的な答えをする場合のみ、well が付与できると考えることを正当化するために、“indirectness”という概念を導入することにする。

この“indirectness”という概念によって、例えば、質問に対する答えの幅が大きくなる、言い換えれば、より間接的な応答を許容する場合ほど、well が付与しやすい傾向がある事実もうまく説明できよう。つまり、一般に、確認を求める付加疑問文や You want to come? のような疑問符が

付されながら、上昇調で発話される文の答えや確認を求める肯定文及び選択の範囲が限定される選択疑問文の答えよりも、wh-疑問文や yes-no 疑問文などの答えに対する方が、well の使用頻度が比較的低いとされている。²⁷

また、次の(40)において、

- (40) “As soon as who sees us?” said the correspondent.
 “The crew,” said the cook. “(Well,) houses of refuge don’t have crews,” said the correspondent.

もし、well が付与されていなければ、記者がロックスの「自分達を見つけるのは船員達だ」という発言に、あまりにもぶっきらぼうにそして無遠慮に非難している含みが出てしまうため、ここでも、well が、一種の丁寧表現あるいはクッションのような役割を果たし、陳述の直接性を緩和している、言い換えれば、関連性の間接性を含意していると言うことができよう。

今までは、「同意・承認・諦め・驚き・不快・苛立ち」などの聞き手の様々な感情的色彩を表す、いわゆる、“qualifier”と関連性の間接性との関連を見てきたわけであるが、well のもう一方の機能である、談話のつなぎとしての役割を果たす“frame”と関連性の間接性との関連においても、同様のことが言えるであろう。

例えば、次の(41)と(42)の例において、

- (41) *Oh* (**Well*), by the way ...
 (42) *Well* (**Oh*), once upon a time ...

Murray (1979) が well と oh との対比によって、予期された話題を導入するのは well のみで、新しい話題を導入するのは oh のみであると指摘していることから明らかなように、²⁸ “frame”としての well は、先行文脈との関連性のある程度保持しながら、談話を進行させるものであるが、(23)~(29)で見たように、どちらかと言えば、談話の境界を示すに過ぎないという働き

を担っている。つまり、“qualifier”としての *well* は、先行文脈の前提となる部分に関与する度合いがある程度強く、談話が一つの一貫性 (cohesion) を保って進行していくのに対し、“frame”としての *well* は、その関連する度合いが比較的強く、単に談話の切れ目あるいは始まりを示しているに過ぎない。

また、これら両者に共通する特徴として、どちらにも、音調上の切れ目を示すコンマが後に付されているということを指摘しなければならない。この事実は、コミュニケーションの観点から言えば、明らかに、談話の流れの上での思考の中断を示すものである。仮に、AとBという二人の会話が成立している限りにおいては、その行為はすぐれて「個人間コミュニケーション (interpersonal communication)」²⁹ であると言えるが、*well* という discourse marker を付与することで、会話の関連性のある程度保持しようと意識しながらも、その一方で、中断によって示されるように、適切な対応を模索・検討しているという点では、たとえ一瞬であろうとも、「個人内コミュニケーション (intrapersonal communication)」³⁰ の領域に足を踏み入れていると言える。

このことは、実質上の聞き手が欠如している、いわゆる、独白の中にも *well* が用いられうるという事実からも支持されよう。

(43) He waited, scowling back along the narrow moonlight lawn towards the street. O.K. So it was like that *well*, twentybucks was worth a ride in the moonlight anyway.

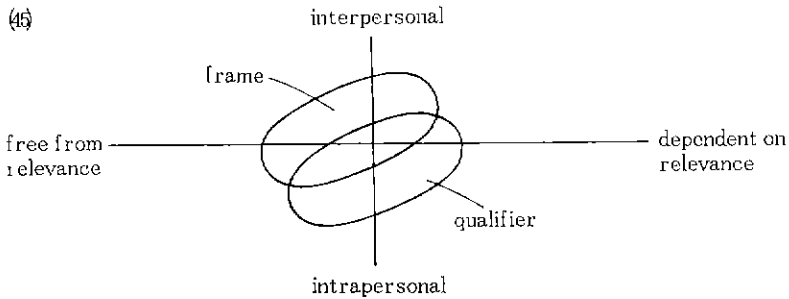
(44) Replacing the cigar, he slapped his right palm against his thigh and said half aloud: “*Well*, I’ll be sixty tomorrow.”

本稿では、まず、“frame”としての *well* と “qualifier”としての *well* を取り上げ、両者とも先行文脈との何らかの関連性を保持してはいるが、前者は一般的な導入機能をもつため、前提となるものをある程度断ち切って、

新しい談話を始めるものである点で、その関連性の度合いは若干低いと考えられることを、また、後者は、先行文脈の前提を受けて、如何に間接的な応答をするかという束縛を受けている以上、関連性という点では、前者よりも高いと考えられることを考察した。

さらに、思考の中断という現象を、コミュニケーションの質という観点から眺めた場合、何らかの感情的色彩を色濃く帯びるのは、後者の場合が圧倒的に多く、その意味で、「個人内コミュニケーション」が高度に進んでいる所産と考えられる。一方、前者の場合、いわゆる、音調による特徴付けを伴わない限り、比較的、感情的色彩を伝えることは少なく、ある意味で、「人間間コミュニケーション」的な機能に近いと言えるであろう。

これらのことを整理して図示してみると、次のようになるであろう。



この図で、特に“frame”と“qualifier”が重なっている部分は、両者が、機能上、峻別できないこともありうることを示している。最後に、このように、両者を連続体の中で捉えようとする試みは、例えば、Svartvik (1980)の次のような見解とも一致することを指摘しておかなければならない。

- (46) The two major functions should ... be seen as places in a spectrum, ranging from the qualifying functions of polite disagreement, qualified refusal, reinforcement, modification and indirect, partial answers to delaying tactics and the framing functions.³¹

V

本稿では、その用語上の多様性にも代表されるように、文文法のレベルでは捉えきれない *well* の諸相に焦点を当て、まず、幾つかの取扱い上の困難さを指摘し、次に、その分布傾向や種々のタイプの文との共起関係を調べ、その *discourse marker* としての特性の故に、主として、文頭の位置（あるいは、比較的自由に、文中の位置）に現れることを、さらにそれ自体命題内容をもたないため、種々のタイプの文と共起できることを見て、それによって、*well* が統語論や意味論の守備範囲では扱いきれないことを指摘した。

次に、機能的特徴に関しては、Carlson (1984) に従って、“*frame*”と“*qualifier*”という2つの機能に大別して概観した。

さらに、*well* の統一的な扱いをめぐる、Grice (1975) の「会話の原則」の中の「関連性」という観点からの一般化を試み、先行文脈との関連性の程度差が、“*frame*”と“*qualifier*”という機能上の差に反映していること、また、*well* の付与によって表される談話の流れにおける思考上の中断は、「個人間コミュニケーション」から「個人内コミュニケーション」への瞬時の移行の現れであり、その「個人内コミュニケーション」への深化の程度の差もまた、“*frame*”と“*qualifier*”という機能上の差を反映しているに他ならないことを主張した。さらに、これら両者が峻別されるべき性格のものではなく、重なりあって、連続体の中に存在することも示唆した。

今後残された課題としては、*well* と感情的色彩を表すのに大きな役割を果たす音調との関連の一般化がどの程度可能なかを検討することが必要であり、また、録音された生のデータを「理想化された」データとして文字化する際に、実際の発話を完全に転写する方法論を確立することも急務であろう。さらに、談話が必ずしも一対一のペアのみから構成されているとは限らないために、もっと大きな単位、すなわち、Owen (1981)³² の言う「談話の *units*」の単位にまで、考察の範囲を広げる可能性も探らなければならな

いであろう。

注

- * 本稿は第13回日本比較文化学会全国大会（1991年6月1日・梅花短期大学）において、「Does *Well* Work Well in Conversation?」と題して行った口頭発表に、加筆・修正を施したものである。当日、司会の労を取られ、貴重な示唆と助言を賜った同志社大学の龍城正明先生、並びに、草稿に目を通して、有益なコメントを下された同志社大学の石黒昭博先生及び名古屋学院大学の赤楚治之先生に感謝の意を表する。
- 1 副詞の *well* と本稿で考察する *well* との歴史的な関連性に関しては、十分に論ずるに値する問題であろう。D. Schiffrin, *Discourse Markers* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987), pp. 333-4 の note 1 を参照。
 - 2 W. W. Francis, *The Structure of American English* (New York: Ronald, 1958), p. 428.
 - 3 B. M. H. Strang, *Modern English Structure* (London: Arnold, 1968), p. 96.
 - 4 R. Quirk, S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik, *A Comprehensive Grammar of the English Language* (London: Longman, 1985), 7. 54 (p. 444).
 - 5 L. Schourup and 和井田紀子, *English Connectives* (東京: くろしお出版, 1988), pp. 124-38.
 - 6 J. Svartvik, "Well in Conversation," *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk*, eds. S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (London: Longman, 1980), p. 168.
 - 7 そもそもは, Labov & Fanshel (1977) において用いられた用語であるが, Schiffrin (1987) では, 幾つかある "discourse markers" の一つとして, その機能に即して, "marker of response" という名称が与えられている。詳しくは, W. Labov and D. Fanshel, *Therapeutic Discourse: Psychotherapy as Conversation* (New York: Academic Press, 1977), p. 156 及び D. Schiffrin, p. 31 を参照。
 - 8 さらに, 聞き取りにくい, いわゆる, 弱形の [w+], [w] を含めれば, *well* の出現する頻度はもっと増すであろう。詳しくは, J. Svartvik, p. 169 を参照。
 - 9 ただ, この場合, 録音されたテープを文字化する際に, 完全に復元できるというわけではないため, どれほど「理想化された」データでも, 音声資料を余すところなく伝えているとは言い難いという問題点もある。

- 10 Svartvik (1980) は、well と音調パターンとの関係に関して興味深い観察を行っている。さらに、Svartvik & Quirk (1980) のような録音テープの転写資料としては大部のものがあるけれども、有益な一般化はまだ行われていない。詳しくは、J. Svartvik, pp. 169-71 及び J. Svartvik and R. Quirk (eds.), *A Corpus of English Conversation* (Lund: Gleerup, 1980) を参照。
- 11 Svartvik (1980) では、スウェーデン語の場合における対応する訳語の選定の難しさが指摘されている。Cf. J. Svartvik, p. 169.
- 12 小西友七編『英語基本形容詞・副詞辞典』(東京: 研究社, 1989), pp. 2002-9.
- 13 以下の用例は、煩を避けて、出典を明示していないが、主に、L. Carlson, *Well in Dialogue Games: A Discourse Analysis of the Interjection Well in Idealized Conversation* (Amsterdam: John Benjamins, 1984) 及び小西 (1989) などに拠る。
- 14 well が文頭を好む積極的な理由として、話し手の何らかの心的態度を示す文副詞的な働きをしているのではないかという主旨のコメントを司会の龍城先生から受けた。それを敷衍して考えれば、例えば、well の歴史的な背景も踏まえて、まず、副詞として捉え、その機能を文副詞的なものと接続副詞的なものと見なすことが、一つの可能性として成立しうるかもしれない。ただ、この場合、文副詞の生起位置の一つである、コンマ付き文末の位置における well の非分布特性をうまく説明できないことや well を文副詞的なものと接続副詞的なものとに必ずしも峻別できないことなどを考えあわせれば、本稿で提案する分析法の方が、より説得力があるように思われる。
- 15 例えば、*With a hammer ... well ... Bill hit Fred. のように、前置された前置詞句の場合でも、場所を表すものでなく、道具などを表すものの後では、非文となることが指摘されている。詳しくは、D. James, "Some Aspects of the Syntax and Semantics of Interjections," *Papers from the Eighth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, eds. P. M. Peranteau, J. N. Levi, and G. C. Phares (Chicago: Chicago Linguistic Society, 1972), p. 165 を参照。
- 16 well が疑問文と一緒に用いられた場合は、相手の返答をせき立てるような印象を与えることがある。詳しくは、小西友七, p. 2008 を参照。
- 17 well が命令文と一緒に用いられた場合には、行為の遂行を促して、苛立ちの気持ちを表すことがある。詳しくは、*Ibid.*, p. 2008 を参照。
- 18 例えば、Svartvik (1980) 及び Carlson (1984) などを参照。
- 19 L. Carlson, pp. 53-65.
- 20 *Ibid.*, pp. 35-52.
- 21 Carlson (1984) では、"dialogue games" という観点から統一的に well を扱お

うと試みているが、本稿の議論とは、直接の関連性はないので、ここでは、深く立ち入らない。

- 22 Grice (1975) では、「会話の原則」として、次のような下位項目を設定している。

Quantity: Give the right amount of information:

1. Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).
2. Do not make your contribution more informative than is required.

Quality: Try to make your contribution one that is true:

1. Do not say what you believe to be false.
2. Do not say that for which you lack adequate evidence.

Relation: Be relevant:

Manner: Be perspicuous:

1. Avoid obscurity of expression.
2. Avoid ambiguity.
3. Be brief (Avoid unnecessary prolixity).
4. Be orderly.

H. P. Grice, "Logic and Conversation," *Syntax and Semantics Vol 3: Speech Acts*, eds. P. Cole and J. L. Morgan (New York: Academic Press, 1975), pp. 45-6.

- 23 R. Lakoff, "Questionable Answers and Answerable Questions," *Issues in Linguistics: Papers in Honor of Henry and Renée Kahane*, eds. B. B. Kachru, R. B. Lees, Y. Malkiel, A. Pietrangeli, and S. Saporta (Urbana: University of Illinois Press, 1973), p. 458.

- 24 Lakoff (1973) は "insufficiency" という概念を次のように説明している。

"In answers to questions, as we have found, *well* is used in case the speaker senses some sort of insufficiency in his answer, whether because he is leaving it to the questioner to fill in information on his own or because he is about to give additional information himself."

Cf. R. Lakoff, p. 463.

- 25 Cf. C. P. Hines, ["Well, ...," *The Fourth LACUS Forum 1977*, ed. M. Pradis (Columbia, South Carolina: Hornbeam Press, 1977), pp. 308-18.

- 26 例えば, *Ibid.*, p. 309 及び L. Carlson, pp. 17-9 を参照。

- 27 D. Schiffrin, p. 105.

- 28 D. Murray, "Well," *Linguistic Inquiry*, 10 (1979), 731.

- 29 本稿では、“interpersonal communication”及び“intrapersonal communication”の簡潔な定義として、それぞれ、“communication between two persons”及び“communication within one person”を採用する。詳しくは、F. Williams, *The New Communications* (Belmont: Wadsworth, 1984), p. 31 を参照。
- 30 Schourup (1983) では、“inner consultation”という表現が用いられている。詳しくは、L. C. Schourup, *Common Discourse Particles in English Conversation* (Ohio: The Ohio State University, 1983), pp. 48-67 を参照。
- 31 J. Svartvik, p. 177.
- 32 詳しくは、M. Owen, “Conversational Units and the Use of ‘Well ...’,” *Conversation and Discourse: Structure and Interpretation*, ed. P. Werth (London: Croom Helm, 1981), pp. 99-116 を参照。

1991. 9. 30 受理

SynopsisHow Well Does *Well* Work in Conversation?

—A Unified Approach—

Nobuyuki Yamauchi

This paper investigates some aspects of *well*, which has been traditionally classified as an “interjection,” and proposes a unified approach to the treatment of *well* through functional and pragmatic analyses.

The first thing to be pointed out is that the difficulties of treating *well* in a simple framework might arise from the diversity and complexity in the meaning and function of *well*. The idiosyncratic properties of *well* are reflected, for example, in incomplete definitions of the term, unestablished analyses of the spoken material as data, and so on.

Next, the distributional and collocational properties of *well* are discussed through the investigation of its syntactic and semantic characteristics. One fact is that it can occur in initial position and sometimes in medial position; in other words, it cannot occur in end position, which demonstrates that it functions as a “discourse marker.” Another fact is that it can co-occur with almost all types of sentences such as declaratives, interrogatives, imperatives, exclamations, and so on, which suggests that it conveys no propositional content by itself. What is corroborated by these facts is that *well* should be treated in pragmatics, not in syntax or semantics.

As the first proposal regarding the linguistic analyses of *well*, we

must refer to Lakoff (1973). Lakoff characterizes the distribution of *well* in the negative identification, where *well* can be attached to an inappropriate or indirect answer. The problem is, however, that the notion which she proposes, "insufficiency," proves to be too narrow to cover the whole range of the uses of *well*. As a solution to the problem, a new notion of "indirectness" is introduced into the analyses.

According to Carlson (1984), it is assumed that there are two major functions of *well*, "frame," which functions as a turn-taking device in discourse, and "qualifier," which signals as a denoting marker prefixed to a non-direct or qualified answers. Given the two functions, it is further discussed that the generalization of the functions can be made in terms of both the degree of "relevance," one of the Cooperative Principles proposed by Grice (1975), and the depth of communication, the transition of interpersonal communication to intrapersonal communication. The more dependent *well* is on relevance to the preceding context, the more it is assumed to function as a "qualifier"; the freer it is from the relevance to it, the more as a "frame." By the depth of communication it is meant that *well* sometimes performs a connective function, which is manifested in the interpersonal communication, while it is sometimes used as a disjunct, which indicates the interruption of thought, that is, intrapersonal communication, shown by the comma following *well*.

In conclusion the interactions between the degree of relevance and the depth of communication provide a most satisfactory generalization of the two functions of *well* and suggest that "frame" and "qualifier" should lie overlapped, not discrete, in function. A graphic way of presenting the generalization might be to schematize it as follows:

